

ヴォイス ～森の声～

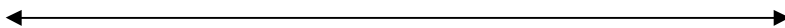
創刊号 vol.1-12008/01/30
中・高校生☆協同編集による
クリティカル・カルチャー・マガジン



ミ特集 学習発表会 2p 単位 6p

Guests

鬼沢真之・中野 裕・早川健治・原 裕子



留学から帰ってきて 1p 自分から動くということ 9p
私の好きな本 10P ギターっていいわ 11p みてかける 13p
いろいろ知るの楽しい 14p どうして創刊するのか 15p

留学から帰ってきて ←

「I HATE SCHOOL .」アメリカの友達と言った。「あの先生はくそだ。」「授業なんてつまらない。」「学校なんて嫌いだ。」それでも彼らは学校へ来た。授業中パーティーの酒やクスリをやる 相談をしながら、それでも出された課題をこなしていた。

何回かつまらなそうに授業を受けていた友達に聞いたことがある。「先生に、つまらないって言えば？」でも返ってきたのはみんな同じような答えだった。

一つ目は「成績にひびくから」。アメリカで出された多くの課題はつまらなかった。良い成績をとりやすい答えが必ずあり、生徒はそれを探しているだけだった。課題の表面の部分だけを見てつまらないと言い、そこからいくらかでも自分なりに広げられるのに、それをせず結局自分もつまらない答えをだしている。そんな感じだった。生徒は単位のために勉強していた。

もう一つの答えは「言っても何も変わらないから」。まわりの人と同じであることを求め、違うことをいやがる生徒がたくさんいた。そして先生もきれいなクラスを作ろうとしている人が多かった。みんながそろっていることがきれいだと考えられていた。自分の授業に自信を持ち、それを否定する生徒をこぼみ、自分のスタイル(プライド)を守ろうとしている先生が多かった。生徒と一緒に学んでいる、生徒の発言を大事にしているという先生は少なかった。そのことも関係してか、自分の意見を言えない、人と本気で話せない、自分自身とも話さない、そんな生徒たちがたくさんいた。

もちろんアメリカには日本にはない良い所がたくさんある。だけど今回はあえて批判的な部分をだしてみた。アメリカは自分の意見をぶつけているというイメージがあるが、これだって「自由」の国アメリカの一つの側面だ。そしてみんなに聞きたいのは、それははたして「自由」の森学園にあてはまらないだろうか？

神座 想(高2)



1



学習発表会の心

～ 学習発表会 ～

2月の18日から22日まで、中学高校学習発表会期間というものがあります。学習発表会とは、自由の森での一年間の学びを振り返り、表現し、そして共有する、そんな行事です。

テストの点数による序列化を行わない自由の森では、学習発表会は自分の学びと向き合う大切な機会であり、それをいかにして表現できるかを試すことのできる場でもあります。

学習発表会で何を発表しよう、と考えると、ついつい当日の結果にばかり気をとられがちです。しかし、これはとても残念なことです。

学習発表会自体もまた、学びの機会の一つです。そして、学びにおいて最も大切なことは、周りから評価される「結果」ではなく、一人一人がいかにして自分の世界を広げ、いかにして周りにつなげることができたかだと思います。

また、一口に「学び」と言っても、様々な物事から生じる様々な学びがあるのではないかと思います。その中でも特に、授業を通して学び感じたこと、そしてクラスでの活動を通して学び感じたことを原点として発表作りを考えてほしいと思っています。

授業やクラスと向き合うということは、どういうことなのでしょう。僕はついつい、自分にとって納得にいくように折り合いをつけて振り返るということをしてしまいがちです。そしていつしか、ありのままから目を逸らすことに慣れ、果ては自分の至らなさを「他者への攻撃」というかたちによってうやむやにしようとしています。ここまで来ると、他者の声に耳を傾けることなど到底できません。つながるのも、自分が付き合いやすい、自分と同質の他者に限られていきます。しかし、これでは本当の学びもつながりも生まれません。

自分の一年間、特に授業とクラスの一年間のありのままと向き合うことは決して簡単なことではありません。しかし、そこから逃げないでほしいのです。そして、一人一人が真摯に向き合うことができたなら、形だけの空っぽな発表ではなく、自分の成長、人とのつながり、そして来年の再スタートに向かう、充実した意味のある学習発表会になるのではないかと思います。（2008.1.24）

早川 健治（高3）

～学習発表会～ 学習発表会で何が大切なのか

そもそも、自由の森はどうして学習発表会をやるのか、ということから語りましょう。

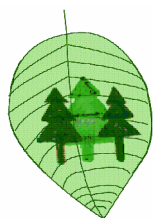
昨年 4 月に全国一斉学力テストが行われ、日本のほとんどの小 6 生と中 3 生が参加しました。自由の森は以下 2 つの理由から、このテストには参加しませんでした。

その理由の一つは、テストによって測られるものは、学びのごく一部にしか過ぎないということです。もう一つは、このテストが、各自治体や学校の全国的な競争に拍車をかける危険性が大きいからです。もちろん自由の森は、学校の考え方になじまないということで参加しませんでした。

今、日本の教育はちょっと前のイギリスの教育政策を導入して行われています。それは、PDCA サイクルと呼ばれる、主に製造業での品質管理に用いられる考え方を土台にしています。P は計画 (plan)、D は実行 (do)、C は点検、評価 (check)、A は改善 (act) ということを繰り返し行うというものです。実行は具体的には授業を軸とした教育です。国家が目標を定め、その到達をチェックする。その間の教育は個々の学校に任せるという考え方です。一見、授業の自由度はあるように感じられますが、目標とその管理は国家が握っているわけで、その許容範囲でしかありません。もちろん、点検評価の結果を互いに競い合うことになります。全国一斉学力テストはそういう歯車の役目を負っているのです。

そもそも学ぶということは、国が決めた目標に向かって点取り競争をすることなのでしょうか。君たち生徒は、工場で組み立てられるテレビや冷蔵庫ではないはずですよ。

自由の森では、このような学びの過程ではなく、個々の生徒が学ぶこととそれを表現して交流し、自ら吟味するという過程を大事にします。これは、学校の教育という限られた場の学びの形にとどまらない、人間が学び成長していく自然な姿なのだと思います。決められたゴールに向かって競い合うことが本来の教育の役目ではありません。自由の森が競争原理に基づく教育と距離をおくのは、学ぶということの構造に関わる問題だと考えるからです。



例えば、生徒の作成するレポートは、前者のサイクルでは教師が見て点検評価するものですが、自由の森においてはクラスや学年の仲間にも向けて発信されるものです。そのことではじめて伝えたいことを選び、伝えるように言葉を選んでいく「意味」が生れるのです。また、他の誰でもない「自分」が表現する意味がここにあるのです。

問題だと感じることや、大事だと思うことを社会に発信し、共感や議論が生まれていくように、学ぶことは社会につながることに、参加することと不可分の行為なのです。

数年前、ある高校生が全校集会で学習発表会について発言しました。Yさんは、「自由の森の生徒は受け取るということをもっと大切にすべきだ」と語りました。それぞれが懸命に発表を作りあげている一方で、他者の表現に耳を傾けるということの大切さに対する意識が低いということを問題にしていました。もちろんこれは単に「観客」の姿勢の問題ではありません。物理的に発信過多という問題は考えなくてはならないと思います。

今、学習発表会の実行委員会を中心に今年度の新しい発表会を企画しています。何をどう発表したいのかという観点は大切ですが、その上で、「受け取る」「見合う」という側面をもっと大事にしたらどうでしょうか。そのことによって、新しい学びの可能性をひらくことになるのではないかと予感しています。（2007.1.10）

鬼沢 真之（高等学校校長）

「原稿依頼」について

「生徒の視点を大切にすること」は、生徒の意見のみを掲載することではありません。むしろ多彩な意見を積極的に発信していこうと考えています。それは、いろんな意見があることで、多角的に物事を「観る」ことが可能になりそれぞれの立場がより鮮明になってくると思うからです。なので、これから教員に原稿依頼していこうと考えています。場合によっては、保護者や卒業生の方にも原稿依頼のお願いをしたい、とも考えています。ぜひ快諾していただき、それぞれの立場からそれぞれの声を発してもらえたら嬉しい、と思います。

頂いた原稿には、基本的に編集メンバーが、コメントを付ける、もしくは対応する原稿を書く等といった形で返答します。そこで互いの視点の違いが垣間見られたら面白い、と思います。

そして最期に、誰かの言葉に、影響を受けるのはいい。ただし、他人の言葉を鵜呑みにはして欲しくありません。他人の言葉は、結局その人の言葉であり、それを読んで考えるのは自分です。解答があるみたいだから「思考停止」するのではなく、もう少し深く考えてみて、出来れば考えることを楽しんで欲しいです。

今回、いろんなゲストの方から原稿を頂きました。ありがとうございました！

～学習発表会～

『学び』を考えないと？

僕は、学習発表会は5日間あるものと思っていました。しかし、話し合いが始まってみると、3日間しかないらしい。リハーサルと片付けがあるから、現実的に3日間しか出来ないだろう、とか言われても。年間日程表にウソが書いてある、ということか。

今、自由の森学園は、行事を「整理」する方向に向かっている、と感じています。鬼さんの言葉を借りるなら「物理的に発信過多」な状態だから、ということでしょう。つまり互いに互いの発信したものを「受け取る」「見合う」ことができないほど、情報が錯綜している、というわけです。

でも僕は、状況はまったく逆だ、と感じています。ぱっさりと言ってしまうなら、一部の頑張っている生徒（高3に多い）と教員は過労と重い責任に悩まされ、その他、「学び」なんて考えない、多数の人たちは軽く、楽な部分だけ関わっています。そして、たいして面白くもないありきたりのものばかりになる。（現代日本の縮図、なのかなあ）

教員が行事を「整理」しにかかったのは、回路を広くしておいても疲労ばかりが募る、「見合う」に値する企画も無い。つまり「見合う」情報がない。ならば、もう少し回路を狭めようか、ということだ、と僕は解釈しています。その消極的な対処法は、確かに一定の効果はある、と感じます。しかし、副作用があります。どんどんと先細りしていくのです。

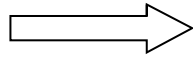
例えば、9月に学園祭をなくす、とします。そうすれば、教員の疲労も少しは解消され、授業はしっかりするかも知れません。しかし、その分、学校見学者が減る、と保護者の方は言います。それは入学者のさらなる減少に直結し、次の年から自由の森学園全体の中で、積極的に動く人の割合が減ることにつながります。そうするとさらに行事をなくすはめになると思います。僕は、「受け取る」「見合う」ことより前の段階の、「発信」をもう1度見直すべ

きではないか、と考えています。ありきたりの中に埋没する、スタンダードを求めるのではなく、自分にしか見えないモノを人に伝えてみよう、ということです。案外、他人と自分の認識には大きな違いがあるものです。その距離こそが面白さを生みます。『学び』ってそういうものだろう、と僕は3年間かけて学んできました。そこを見直せば、3日間じゃまとめられない『学び』があふれると思うけどなあ・・・（2008.1.28）

中島 大地（中3）



単位への思い



自由の森は中学単位制じゃないけど、高校は単位制だ。私は中学から自由の森にいてそのまま高校にも入学した。高校にも入学して半年以上がすぎたので単位制について私が思った事を書こうと思う。

単位は、あるていど取らないと、次の学年に上がれない。だから、「単位が足りないから次の学年に上がりませんでした」って人がどうしても出てくる事になる。もしクラスに、単位が足りないからいなくなってしまう人がいて、その人とはあまり関わりがなかったとする。でもその人とこれから知りあう機会があったかもしれない。そう考えてみると、私が学校に行く大きな理由の1つにある、人と関わりあう、知りあう、話すという色々な出会いのチャンスを、単位が足りないからと言う理由でうばわれてしまう、なんだかそれってすごくもったいない気がする。私はクラスから人がいなくなる理由が単位が足りないからというのは、普段自由の森で生活している中で感じない種類の冷たさを感じた気がした。

私にとって授業は、受たいから受けるし、課題も出したいから出している。だから自分がやりたくないものは結構出さないし、やらない。そのスタイルは、自由の森に入ってから私の中に出来上がったものだと思う。(いつもいつもそう言うわけにはいかないだろうけど、今はまだそれでもいいかなとも思っている。)私は単位制のせいで、授業を受ける、課題を出すと言う事が、「単位をもらうため」と言う形に自分がなってしまうまいかどうかなんとか不安になった。単位をねらうために学ぶなんておかしいし、自分がまず楽しめないと思う。私は授業も課題も自分が楽しいからやっていたい。

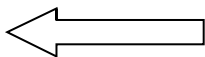
だから私にとっての単位は、やりたいから、楽しいみたいからやった事に、かってについて来た物、という意識でいたいと思う。これが高校に入って私が単位について思ったことです。

(2008.1.10)

小金沢 基(高1)

~単位 ~

「単位への思い」を読んで



まず、始めに。

高校は、義務教育である中学とは異なり、74単位という単位をもって卒業とする、ということが日本の学校では定められている。フリースクールのように「高校」という名前がない学校ではこのことは関係ないが、「高校」という名が付く以上、この枠は無視できない。そして、自由の森は、「高校」である。この枠の中に入っている。その枠の中で、自由の森は他の学校とは違うところに、他にはない価値がある。そう思う。

では、自由の森が他の学校と違うところは何か？と考える。恐らく多くの方は真っ先に「テストがない」「校則がない」ということを思い付くだろう。しかし、長い時間をここで過ごしている内に、それだけではないということが、段々と感じられてくる。私もこの学校に来て、自由の森って何を大切にしているのかってことを、ずっと考え続けてきた。今も考えてる。自由なこと？通知表を配るだけの評価をしないこと？それは全てその通りな気がするのだけど、なにか、その考えには中心となる核のようなモノが足りないと思っていた。

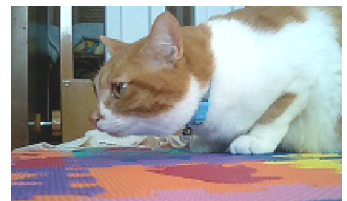
でも、今、他の学校と決定的に違うのは授業であると考えている。例えば、公開研の授業をクラスで見たとき、たった90分の授業だけでも私が中学・高校で教わってきたのとは全く違っているのが分かった。それは、ある歴史の一場面のことを題材にしながら、人間の生の営みの中で、形を変えて繰り返される問題があるということをお伝えしようとしているのだと思った。そして、それを単に説明するだけでなく、みんなに考えさせながら、この世界の捉え方を育もうとしているのだということが分かった。検討会の時間に、「他の学校ではこの部分はどれぐらいの時間を掛けるのですか？」と質問したら、「普通は20分くらいかな。こんなには掛けないよ」と言っていた。

しかしながら、授業の上辺だけを見て、「つまらない」「興味が湧かない」という生徒はいる。そして、自分のその思いこみで教室に姿を現さなかったり、手元の携帯ばかりを見ている人がいる。

それでは敢えて「自由の森」にいて学ぶ意味が無いと、私は思う。他の学校であるなら、テストのために勉強し、課題やノートは他の人に写させてもらい、上手くやっていたらいいのだろう。でも、ここは違う。ひとつひとつ世界を見る眼を育み、それが織り重なり、初めてテストでは表せない目に見えない彩りが立ち現れてくる。高1から高2、高3へと学年が上がるに連れて、授業の中身はより深い方へ、考えなくてはすぐには答えが出ないようなものになっていく。そのため、一学年ずつ積み上げてきたものがなければ、恐らく、どんなにおもしろい授業が目の前で展開されていても、それを「解る」ことができないだろう。考え、理解する力は、それぞれの教科と長い時間を掛けて出逢っていくことで、培われていく。（「出逢う」というのは、瞬間ではない。時間を掛けて、「出逢う」のだ。そう思う。）

そういう出逢いの手前にあるのが、単位だと思う。切っ掛けはどうでもいい。その枠に縛られるのではなく、それはどうにもあるものだけど、それを超えて、自由に泳げるように。そして、自分の中にそれぞれの力を蓄えて、この学校を卒業して行って欲しいと思っている。（2008.1.25）

原 裕子（日本語科）



Cham Cat

自分から動くということ。

自由の森学園は生徒主体、といいます。しかし、生徒の意見を集約している組織があるわけではありません。教職員会議の決定は、学校の決定です。昔は、生徒が年間日程を考えるのに関わっていたというけど、今はそれもありません。教員の言葉を鵝呑みにするだけなら主体性なんてかけらも無い、と言い切ってしまうと良いと思います。

生徒主体なんて可能か？ それ以前に、生徒主体って何なのか？

それでも、だからといって、生徒主体を目指す、というスタイルをやめることは絶対に出来なはずです。それをやめるのは、自由の森学園がなくなるのと同じことです。少なくとも僕はそう考えています。だから「自分から動くこと」を見つめなおす必要があると思います。

今年度の中学3年生の修学旅行は、「人から学ぶ」「とことん議論する」「深い学び」といったことを主眼に据えてすすめていきました。僕は、とてもいい修学旅行になった、と思ったし、みんなもそう言っていました。けれど、教員がすすめた部分というのが物凄く大きかったな、とも思いました。量としてはたいしたこと無い。でも、僕だけかもしれませんが、最重要な部分、核心の、心の部分は教員主導ですすめられていた、ということ強く感じました。

もちろんそれが悪いわけじゃないです。実りある修学旅行を目指すためには、それしかないかも知れません。実行委員会の人たちは苦しみつつ、少しずつ、道を探り、いい修学旅行を作るべく努力していました。優しい見方をするなら、その努力が報われたのだ、とも言えます。

そして、今年度（去年）の入学式についても同じことが言えます。入学式のあまりのスムーズさに、自由の森学園の元保護者が怒ったそうです。「どうも生徒が進めているとは思えない（つまり、教員が進めているということ）自由の森学園はどうなってしまったんだ！」

でも、時間がないし、しかたがないとも言えます。まさか、新入生を中途半端な入学式で迎えるわけにはいきません。それなりに教員がフォローしてあげないと、春休み明けになって、準備が終わっていませんでした、ではすみません。

自分から主体的に動くことは、とても苦しいことでもある、と思います。



あなたは、誰かの掌(てのひら)の上で踊っているだけではないのか？

足元を見つめてみて欲しいです。

中島 大地(中3)



私の好きな本

私が好きで何度も読んだ本の中に、ローラ・インガルス・ワイルダーさんの本がある。彼女は、1867年の開拓時代のアメリカに生まれ、少女時代を家族で新しい土地を求めての、旅をしながらの生活を送る。

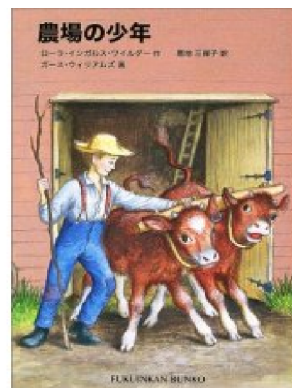
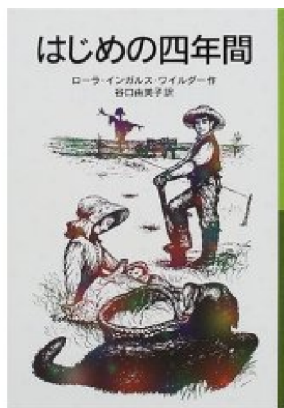
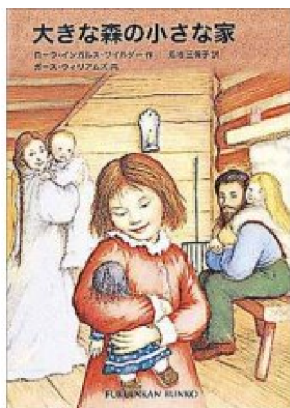
彼女が書いた本は、その時の経験を自伝にした本で、『大きな森の小さな家』『大草原の小さな家』『プラム・クリークの土手で』『シルバー・レイクの岸辺で』『長い冬』『大草原の小さな町』『この楽しき日々』『はじめの四年間』とシリーズになっている。外伝で、彼女の夫アルマンゾの少年時代を描いた『農場の少年』も出ている。

開拓者としてこの時代のアメリカを生きたローラ一家や人々の生活は楽ではない。一生懸命耕した畑は、イナゴの大群に襲われ、冬は吹雪が続き物資が届かず食糧不足になる。でも、ローラ一家の心は、活気にあふれていて明るく、まったく暗くない。物を本当に大切にし、その時を生きるために畑を耕し生き物を狩る。

ローラ一家だけではなく、この時代のアメリカ人の多くは、このような生活を送っていたのだと思う。あのアメリカにも、こんな生き方をしていた時代があったのかと思い、開拓時代の活気あふれるアメリカの空気を、味わってみたかったなぁと思った。

小金沢 基(高1)

- * 上記の「インガルス一家の物語」は、福音館文庫、講談社文庫、講談社青い鳥文庫、角川文庫、岩波少年文庫等で読むことができます。



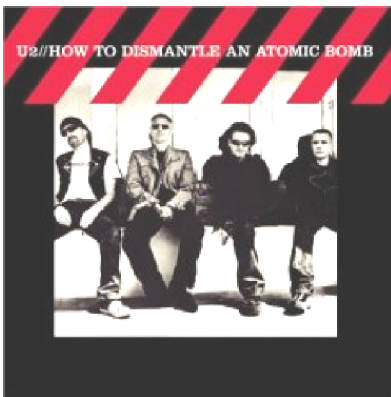
~Music

ギターっていいわ。

初めて人前でギター演奏したのが 2007年度の入学式。エレキで入場曲「スタンド・バイ・ミー」退場曲「カントリー・ロード」だった。音楽祭のクラス合唱ではアコギ（アコースティック・ギター）で「全力少年」をバンド演奏した。

そもそもオレが初めて手にしたギターは中1の頃、エレキでもアコギでもなくクラシックギター（ガットギター）だった。最初は何も押さえなくて「ジャーン」って弾くのさえ出来なかった。（笑）でも知り合いの大学生に教えてもらってちょっとずつ上達していった。でも中2の最初ぐらいまでサボっていて何も弾けなくなった。その時点でもうギタ

ーをやめようかな～とか思ったりもした。その時、「U2」というバンドのアルバム「How to Dismantle an Atomic Bomb」（原子爆弾解体新書）を聴いて衝撃を受けた。そこでエレキ・ギターってカッコー!!って思った。その何ヶ月か後にエレキを買った。最初は全然弾けなかったけど、練習していくうちにだんだん弾けるようになった。それが楽しくてうれしくてしょうがなかった。



ギターをやってる人なら分かるかもしれないけど、弾いているとあっという間に時間が過ぎてく。そして何より楽しい。弾いても弾いても弾きたりない...。「もっと弾きたい」という欲にめっちゃかきたてられる。

オレは、みんなにギターを好きになってほしい。もちろん全員っていうのはムリだけど、ちょっとでも多くの人にギターに興味をもってもらいたい。教室で弾いている時は周りにメイワクだなーとか思いつつやってる^^。うるさいもんね。（汗）でも弾いてる時はすごく気持ちいいんだよね（自分は）。ちょっとでもこの気持ち分かってほしい。



ギターをやってない人でも自分の好きな事に熱中してる時の気持ちはどう？楽しいでしょ？それと同じだと思うよ。

ギターで弾く時の自分の好きな曲をあげてみる。

SUM41の「O ver My Head」(始めのメロディ聴いて一発で好きになった) 「The Hell Song」(このアーティストで一番最初に練習した曲) 「Still Waiting」(ソロが好きなのは「Machine Gun」も) 、Bullet For My Valentineの「10 Years Today」(理由は特にないけど好き) 、Avenged Sevenfoldの「Unholy Confessions」(単純にかっこいい) etc・・・。



これを書いてたら洋楽ばかりだなって思った。(笑)「なんでだろう？」って考えてみたらケッコー色々でてきた。

1. 単純にギターの事が好きだから、ギターのパートばかり聴いてる。洋楽はギターがカッコイイのが多い。(偏見かもしれないけど)
2. 英語の歌詞を日本語にするとおもしろい。「こんな事言ってるんだ」とか、何気に英語の勉強になる。
3. 歌詞をパッと聴いたり見たりしてもすぐに意味がわからない所がイイ。
4. 邦楽にはない勢いとかオーラがある気がする。・・・以上。

佐々木 優太 (中 3)



ギターをはじめようと思っている人むけの本。

「DVD付 これから始める ロックギター入門」
(DOREMI)

すごい初歩的な事が書いてあるから初めての人にいいと思う。多少何曲かのってるよ。

みてかける



時間。時間なんてものが実際にあるってことを考える。朝、設定された時間に目覚まし時計がなると、あぁ…もう7時だ…起きないと…って思うし、昼、お腹がへってきて、おっ！もう12時40分だ、食堂に行こう、とか思い、夜、あ…今夜もこんな時間になってしまった…、と時計を見て思う。こんな感じの、決まった時間は、

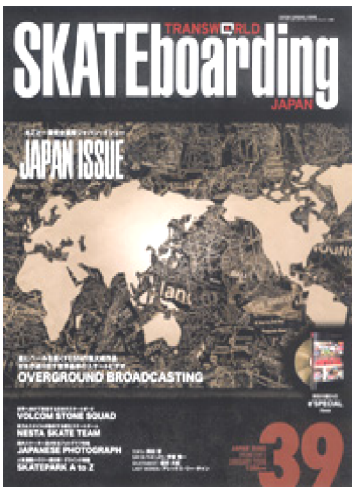
だれにでもあるんだろうな、と思います。みんなは、これとは違う時間を、身近に感じる事はありますか？

スケボー。

自森にいる人なら、見かける機会が多いかもしれない。晴れた日の放課後やまれに授業中など。パッと見たただけだと、ただひたすらワイワイがちゃがちゃしているだけのように見えるかもしれない。だけど、スケボーには日常とは少し違う時間があります。言葉にするなら、たぶん、一瞬とか瞬間って名前の時間。一秒にも満たないような時間の中で、脳みそから爪先までを使い、前

の一瞬より、より高く、より速く、より綺麗に、より楽しく、それぞれの目指す理想の時間のために、一つ一つの動きを意識して。長い長い時間をかけて。

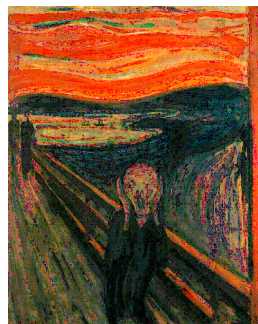
授業に出ている時間や、何かを食べている時間、起きている時間と眠っている時間、集中した時間もあれば、だらだらとした時間もあります。みんな今まで長い時間を生きてきたから、経験したことのない時間はないと思います。そんな中で、一瞬のために時間を翔けて、賭けて、駆けて、駈けて、かけたくなる人達がいて、時間をかけてでも楽しんでいたくなる何か、スケボーの中にはあります。



いろいろ知るの、楽しい。

~ ART ~

去年の秋から冬にかけて、知らなかったもの、本などであらかじめ知っていたものを実際に目にしたり耳にしたりすることが、わりと多かった。意識的につくった時間ではなくて、たまたまみんなそういうものが自分の前に現れていった感じ。この期間で出会ったものは、千利休の作った茶杓「泪」(大徳川展)、ムンクの絵(ムンク展)と、忌野清志郎(John Lennon Super Live)などなど。この他にもいろいろと考えさせられるような出来事が次々に偶然的にやってきて、まあわりと充実感のあるというか、勢いのあることというか、流れに身を任せているだけでいろいろなもの勝手につながりだして、そうしたことにびっくりしたり興奮したりすることがたくさんあった。それぞれいろいろと書き出すときりがないこと、依頼されたことは「ムンク」のことなので、そのことにしぼって書くことにする。



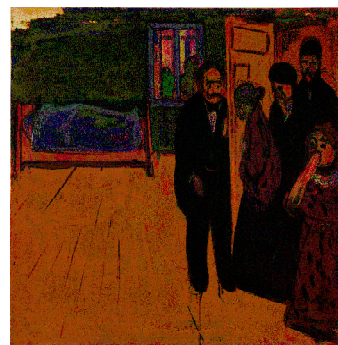
叫び

ムンクの絵というと、ほとんどの人が「叫び」を言う。私自身も「叫び」の絵はずいぶん前から見知っていたけれど、この間の「ムンク展」に行ってみたら、ずいぶん違う世界がそこにはあった。

ムンクっていう人の絵は、もともととても気持ち悪い印象だった。

並んでいる絵のタイトルは、たとえば「不安」とか「絶望」とか。

「死臭」なんてのもあった。死臭だよ、死臭。そんなタイトルの絵って。絵を見てみると、遠くの方に、きっと死臭を放っている遺体が寝ているベットがあって、ドアを開けて近親者が別離のために部屋を訪問しているのだけれど、ちょっと小太りのおばちゃん(実は娘らしい)が、「死」を目の前にして鼻をつまんでいたりしている。



死臭

「叫び」「不安」「絶望」は、シリーズもので、それぞれの絵に出てくる人たちはみんな目が飛んじったりしてすごい表情をしているのだけれど、やっぱりどことなくユーモラス。空がでろでろだったり海もぐちゃぐちゃなだけれど、絵をみていて「なるほどね」って勝手に納得をつくったりできるのが、私にとってのムンクの絵。

絵っていうのは不思議なもので、その瞬間をあるがままに切り取ったものではないのが写真と違うところ。描いた人の意図的なイメージがある。それを見る側が勝手に解釈してきつこうなんだろうなあって、そこに横たわっている「物語」を想像する楽しみがある。ムンクの絵は、「物語」を想像しやすい。ここで、描き手の意図と私の想像がっているかどうかは、ちっとも問題じゃなくて、見ていてそういう時間を過ごせるのが、楽しいっていうこと。

中野 裕 (数学科)

どうして『ヴォイス』を創刊するのか

このごろ、自由の森学園が、たくさんの「観客」と、一部の「舞台に立つ人」に二分されている気がします。これはあまり、いいことではないと思います。いろいろな人の声が出ると、自由の森学園全体がだんだんと同じ色に染まっていってしまっ、
「多様性」や、「個性」といったものが見えなくなってしまいます。

そこで、批評紙・意見紙として『ヴォイス』を作ることになりました。

まず、ある物事をとらえるとき、生徒の視点を大切にします。大人の理屈や視点も、もちろんあるかと思いますが、まずは自分達自身のベースに戻って考えていこう、というわけです。どんなに立派な事を書こうと、まだ半人前、できないこともあります。でももしかしたら、まったく新しい視点が、ポッと生まれてくるかも知れません。そういったことを意識していけたらいいな、と思います。

それともう一つ、自由の森学園はあとの人たちに受け継ぐことがあまり上手ではない、と私たちは感じています。1回1回、いいものが出来ても、そこで終わってしまう、途切れてしまっています。しっかりと積み重ねて、つなげることで見えてくるものがあるはずなのに、それではもったいない。

『ヴォイス』とは言葉どおり、声のことです。鋭い指摘を取り上げ、小さなつばやきも拾い上げ、その「器」として、声の発信源となっていきたいなあ、と思います。

編集 一同

Special thanks to all the Guests



Cham Cat

ヴォイス編集部

〒357-8550 埼玉県飯能市小岩井 613 自由の森学園図書館 出版相談室（大江）

Fax 042-972-6661 e-mail jb0@jyunomori.ac.jp

編集；佐々木優太・中島大地（中3）小金沢 基（高1）神座 想・深沢 周（高2）

（表紙；佐々木優太）